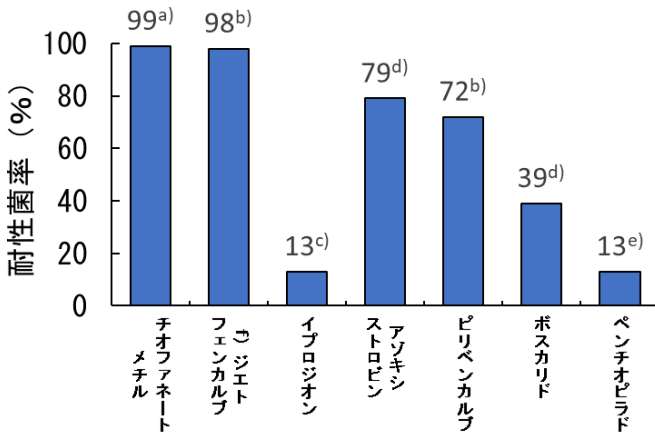


夏秋作型のトマト産地における 灰色かび病の薬剤感受性を調査しました

トマトの主要病害である「灰色かび病」は、各種薬剤に対する耐性菌の発生が多く報告されており、耐性菌の蔓延による薬剤の防除効果低下が懸念されています。耐性菌の蔓延を未然に防ぐためには、定期的な耐性菌発生状況のモニタリングを実施し、適切な防除体系の構築に役立てていくことが大切です。

そこで、県内夏秋トマト産地における耐性菌発生状況を明らかにするため、2018年に66名の県内生産者施設を対象に、登録農薬8剤について感受性検定を実施しました。

○各種薬剤の耐性菌発生割合

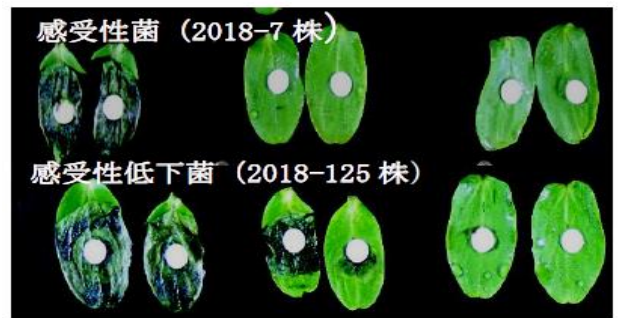


※耐性菌の内訳

- a): 高度耐性菌、b): 弱耐性菌、c): 中等度耐性菌、
- d): 耐性菌、e): 中程度耐性菌
- f) 混合剤の成分

○感受性低下菌に対するフルジオキシニル剤の防除効果(キュウリ子葉法)

常用の1/10濃度散布区で発病が認められる感受性低下菌の発生を確認しました。

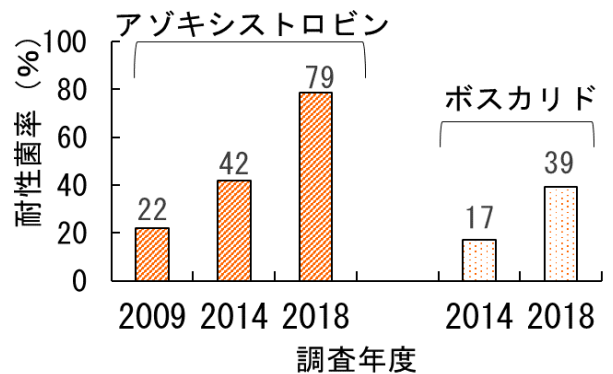


無処理区 1/10濃度 常用濃度
フルジオキシニル

上段: 感受性菌、下段: 感受性低下菌

●過去の調査との比較

アゾキシストロビンおよびボスカリド耐性菌の大幅な増加傾向が認められました。



(研究成果)

- ・アゾキシストロビン (QoI剤) の耐性菌は、4年間で約 1.9 倍、ボスカリド (SDHI剤) の耐性菌は、4年間で約 2.3 倍に増加していました。
- ・比較的耐性菌発生リスクが低い剤とされてきたフルジオキシニルについても、感受性低下菌の発生を確認しました。
- ・感受性低下が進んでいる薬剤は、使用中止や使用回数抑制が必要です。また、保護殺菌剤を中心としたローテーション散布、環境制御技術の導入など耐性菌が蔓延しにくい環境づくりを心掛けてください。